

学校長式辞

春を迎え、恵みの雨が大地を潤すこの佳き日に、来賓の皆様、そして保護者の皆様のご臨席を賜り、**木更津総合高等学校第23回卒業証書授与式**を挙行できますことを、心より御礼申し上げます。

そして卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

今日の卒業式は、皆さんが制服を着て本校に登校する最後の日となります。三年間を振り返り、この学び舎での日々は、皆さんにとってどのような時間だったでしょうか。

皆さんは、2023年4月に本校へ入学しました。その前の中学校三年間は、まさにコロナ禍のまっただ中にあり、入学式も、学校行事も、思うように実施できない日々を過ごしてきた世代です。多くの制約の中で、「当たり前」が当たり前でない時間を経験しました。

だからこそ、高校生活が本来の形で戻ってきたときの喜びは、ひときわ大きなものだったはずです。

全校生徒が一斉に五十四台のバスで向かったディズニーリゾートへのバス旅行、体育祭と文化祭は3年間全て、完全な形で実施されました。四泊五日の修学旅行では、仲間と寝食を共にしながら、互いの個性を認め合い、協力して一つの時間を創り上げるという、本校ならではの醍醐味を味わってくれました。

中学校での制限の多い時代を経験したからこそ、皆さんは高校生活3年間で、人と関わることの尊さ、共に過ごせることの喜びを、誰よりも深く理解しているはずです。

さて、明日から皆さんは人生の新たなステージへと進みます。

成人年齢が十八歳となった今、進学する人も就職する人も、皆「大人」として社会に向き合うこととなります。自らの判断でできることが増える一方で、そのすべてに責任が伴います。

しかも、皆さんが歩むこれからの社会は、決して先が見通しやすいものではありません。少子高齢化の進行、国際情勢の不安定化、価値観の急速な変化――社会は確実に姿を変え続けています。

このような時代に必要とされる力とは何でしょうか。

それは、目の前の現実をしっかり受け止め、自分に何ができるのかを考え、行動に移す力です。誰かが何かをしてくれるのを待つのではなく、自ら社会と関わり、変化に応じて自分自身も成長していく。その柔軟さこそが、これからの生きる皆さんの大きな武器となります。

しかし、どれほど時代が変わっても、皆さんが社会で生きていくために、決して変わらない大切なものがあります。それは「良い人間性」です。

本校が大切にしてきた「真心教育」は、まさにこの人間性を育てる教育です。

至真殿入口の柱に記されている「一に人柄、二に体力、三に知識」という言葉のとおり、どれほど知識や技術を持っていても、人としての在り方が伴わなければ、それを社会で活かすことはできません。

皆さんは、多様な地域から集まった仲間と三年間を過ごし、異なる価値観を受け入れながら、協力して物事を成し遂げる力を身に付けました。それこそが、社会に出て最も必要とされる力であり、本校で培った「良い人間性」にほかなりません。

そして、これからの社会に出る皆さんに、もう一つ、はなむけの言葉を贈ります。

どうか、自分自身に「心の壁」をつくらないでください。

「どうせ無理だ」「自分にはできない」——そう思った瞬間に、人の可能性は閉ざされてしまいます。

かつて、日本人が陸上男子100メートルで9秒台を出すことは不可能だと言われていました。しかし2017年、固定観念という壁を打ち破り、**桐生祥秀選手**が日本人初の9秒台を記録しました。それをきっかけとして、そこからさらに3人もの日本人が100mで9秒台を出しています。限界を決めていたのは、能力ではなく、心だったのです。

「どうせ無理」ではなく、「自分にもきっとできる」——
そう信じて挑戦する人にこそ、新しい道は開かれます。

皆さんのこれからの人生は、決して平坦ではないでしょう。

しかし、どのような困難に出会っても、本校で培った人間力と真心が、必ず皆さんを支えてくれるはずです。

私たち教職員一同は、皆さんが卒業した後も、いつまでも応援し続けます。嬉しい時も、苦しい時も、どうぞ母校を訪ねてください。ここは、皆さんの帰る場所であり続けます。

結びにあたり、保護者の皆様、並びにご来賓の皆様には、これまで本校教育に賜りましたご理解とご支援に、あらためて深く感謝申し上げます。

卒業生の皆さん。

健康に留意し、自らの夢に向かって歩み続けてください。その努力がやがて大きく花開き、実を結ぶことを心から願い、式辞といたします。本日は、誠におめでとうございませう。

令和8年3月3日

木更津総合高等学校 学校長 真板竜太郎